毎月11日掲載

防災・減災のページ

巡回ワークショップ　@宮城・七ヶ浜町代ヶ崎浜

むすび塾

風化防止へ工夫凝らす

地域防災活動の活性化

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は9月20日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県七ケ浜町の県漁協七ケ浜支所代ケ崎浜会議室で開いた。東北以外の開催も含めて通算36回目。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長の進行で、代ケ崎浜の住民10人が地域防災活動の活性化について意見を出し合った。

代ケ崎浜は町北東部にある人口約800の地区で、東北電力仙台火力発電所が立地する。町によると3月現在、震災で死亡した七ケ浜町民は94人。代ケ崎浜では6人が犠牲になった。

むすび塾で、住民たちは自宅や勤務先で遭遇した震災を振り返り「黒い波が次々発電所に押し寄せた」「津波とともに地鳴りが響き渡り、家がバリバリと音を立てて壊れた」と証言。地元漁協にいたという代表区長の伊藤喜幸さん(73)は「屋根瓦やブロック塀が崩れ落ち、逃げ場がないほどだった」と語った。

浜は松島湾に面しているが、1960年のチリ地震では大きな津波被害はなかったという。お年寄りをはじめ、当時の体験を基に「津波は大丈夫」とみる人が少なくなかった。「地震後すぐに逃げない人もいた」との指摘も聞かれた。

地区では2004年に自主防災組織を設立。1次避難場所や経路、海抜を記した「おらいの防災マップよがさき」を作成し、全戸に配布。障害者の搬送を想定した避難訓練にも取り組んできた。震災後は、車を使った避難を模索している。

木村理事長は円滑な車避難の実現に向けて、倒れる可能性があるブロック塀の生け垣などへの転換のほか、「土のうは浸水をせき止めるだけでなく、陥没した道路の応急措置にも使える」とアドバイスした。

訓練への積極参加を促すアイデアに話が及ぶと、機構の宮下加奈専務理事は「家にある備蓄食料を持ち寄って料理して食べたらどうか。地域住民が加わる運動会の借り物競走で、学校の防災用品を使うアイデアもある」と提案した。

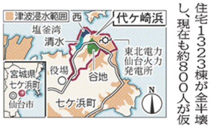
震災の風化を心配する意見も目立った。地区評議員の佐藤徳康さん(62)が「震災を経験しなかった次世代にどう伝えるかが課題だ」と言うと、地区区長の斉藤庄英さん(68)は「震災当時を振り返る住民の声を集めたら貴重な資料になる」と応じた。

伊藤代表区長は「数十年後か数百年後にまた大地震と津波が来たら、今度は犠牲者を震災の1%に抑えたい。町内では震災で約100人が亡くなったが、1人に減らすということだ」と力を込め、備えのレベルアップを誓った。

町全域の36%浸水

宮城県七ケ浜町は、仙台市中心部から東に約20㌔離れた場所に位置し、南が太平洋、北と東が松島湾と、三方を海に囲まれている。町の中央部は、なだらかな丘陵地になっている。

町によると、9月1日現在の世帯数は6434、人口は1万9447。震災では津波で町全域の36・4%が浸水し、94人が死亡した。住宅1323棟が全半壊し、現在も約800人が仮設住宅で暮らす。



町の主産業は漁業。カレイやアイナメ、ウニ、アワビなどが水揚げされる。ノリの養殖業は津波被害を受けて激減したが、現在は収量で震災前の7割程度まで回復した。

代ケ崎浜は町の北東部にある。谷地、西、清水の3地区で構成し、人口は約800。震災で6人が犠牲になった。

西、清水両地区は海に面し、釣り場としても知られる。西地区の背後には、標高56㍍の多聞山がある。住民の避難先になっているほか、日本三景・松島の展望スポットでもある。

谷地地区もかつて海と接していたが、沿岸に東北電力仙台火力発電所が建設され、海と隔てられた。

巡回ワークショップ
むすび塾

参加者は震災体験を振り返った後、車避難対策や避難訓練について意見を交わした。代ケ崎浜は三方が海に囲まれているため、住民は震災前から、津波ハザードマップを作り、全戸配布していた

人集まる場 利用しよう

減災・復興支援機構専務理事

宮下　加奈さん

避難訓練に参加する若い世代が少ないという話が出たが、人が集まる機会に合わせてできることや日常の延長線でできることを考えてみよう。

例えば小学校の運動会。借り物競走で、防災に役立つ物を学校の中から探してみてはどうか。保護者だけでなく、地域のお年寄りも参加する。学校側は行事を見てもらえる。皆さんにとっては、大勢が集まる場で防災活動をアピールできる。

消費期限が切れそうな備蓄食品を持ち寄り、食べ比べる試食会も勧めたい。女性たちが活躍する場になる。

何があっても避難しないというお年寄りへの対応としては「あなたに何かあった場合、子どもや孫、助けられなかったと悔やむ周りの人の気持ちを考えてほしい」と話す方法がある。避難しないのは勝手だが、みんなが悲しむと話して、説得を試みてほしい。

後世に震災の経験を伝えるために、家族内や地域で震災の生々しい話をすべきだろう。当時の考えや行動、後悔したことなどを具体的に話せば、いざというときの避難の必要性、重要性が伝わる。

■むすび塾に参加して——宮城・七ヶ浜町代ヶ崎浜

【防潮堤について】七ケ浜町にも防潮堤の建設計画があるが、高い防潮堤を造れば海が見えなくなり、津波の被害を大きくする原因になりかねない。計画についてもっと議論が必要だ。

＝代ケ崎浜地区代表区長・伊藤喜幸さん(73)

【震災の経験】家族の安否を確かめるため、自宅に何度も電話した。10回ほど続けてリダイヤルし、ようやくつながった。家族や親戚、近所との連絡手段をどのように確保するかが大切だと思った。

＝代ケ崎浜地区区長・斉藤庄英さん(68)

【災害への備え】震災前から防災マップの作成や防災訓練に取り組んできたほか、夏祭りなどの行事を開催してきた。震災では住民同士の絆が生かされ、避難所の運営と生活がスムーズにできた。

＝代ケ崎浜地区区長・土井真一さん(71)

【災害への備え】家庭での「会話による訓練」が必要だと思う。職場、学校、家庭と、それぞれがいる場所で自分の身を守ること、忘れ物をしても戻らないことなどのルールを話している。

＝谷地地区会長・赤間信一さん(71)

【防災の課題】自分たちが取り組んできた防災活動を、若い世代に引き継いでもらうことも、私たちの役割だと思う。多くの住民が参加しやすい訓練の方法などを考えたい。

＝西地区会長・伊藤喜代勝さん(69)